

金沢

——美術、工芸王国の新たな挑戦

浅野川と犀川が市の中心を流れ、自然の多い風光明媚な街、金沢。前田藩が培った金沢漆器や加賀友禅などの伝統工芸が今なおあかんな街。この歴史のある城下町が、今、大きく変わろうとしているのだ。そのきっかけを作ったのが、昨年開館したばかりの金沢21世紀美術館。現代美術の登壇が、美を愛するこの街に新たな活気を生み出した。

取材・文 木内 昇 写真 谷山 寛



近代的なビル群を過ぎると数百年の年月を経た武家屋敷が現れる。かつて生活の中心にあった用水路が今も街中を走り、江戸時代にできた近江町市場は変わらぬ活気を見せている。金沢に積み重なってきた歴史は、今なお街に息づいている。市の中心部、百万石通り沿いには金沢城址と兼六園。城下町の風情が漂う景観の中に、忽然と姿を現す真っ白な円形の物体が。近未来的な建築物は古都の香のする街とは馴染みそつにないのだが、なぜか周囲の名跡や公園と一体化して開放的な雰囲気を感じているのが不思議である。

これが〇四年十月九日にオープンし、大反響を呼んでいる「金沢21世紀美術館」。公立美術館の集

客が年平均五、六万人と言われる現在、一年で約一五〇万人動員という驚異的な数字を打ち出した。「新しい文化の創造」と「新たなまちの賑わいの創出」を目標に開設したので、この結果はうれしい限りです。」

というのは、美術館広報の落合博晃氏。

ことの発端は一〇年前。市の中心部にあった金沢大学と同大学教育学部の附属小中学校が移転し、その後石川県庁の移転が決定した。数万規模の人が集つ場の消失。当然、街の活気にも影響が出る。「新たに人が集まる場所を作る」ことが急務になった。そこでシネコンでもアミューズメントパークでもなく「美術館」という計画が



公園の中央にある美術館全景。裏と表のない造り、通りからはカフェも見え、これまでの美術館に多い敷居の高さは微塵も見られない(右上)。トニー・アウスラーの作品『ピンク』。投影された顔が動き、一日中独り言をつぶやく(右下)。美術館広報宣伝担当の落合博晃さん(左上)。レオナルド・エルリッヒの『スイミング・プール』。水を張った強化ガラス面に、プール内部とプールサイドの人が出会う。こうした体験型のアートが多いのも21世紀美術館の特徴(左下)。





片羽刷毛でばかしを入れる毎田健治先生（右）。美しい着物の他、石川県立音楽堂の緞帳を手掛けたことも話題に（左上）。市民ギャラリーの壁面を彩るマイケル・リンの作品。SANAAとのコラボレーションによるロッキングチェアが居心地の良さを演出（左下）。



浮上したのは、金沢という土地柄が大きく関係している。
「石川県は人間国宝が全国で一番多いといわれています。そこからもわかるように金沢には作家活動をされている方が非常に多い。そのため自然発生的に『美術館が欲しい』という声がたくさんあつ

たのです」

金沢は言わずと知れた伝統工芸の街。加賀友禅、九谷焼の産地だが、21世紀美術館が主軸のひとつに据えたのは、一見その対極にあるように思える現代美術だった。

「伝統工芸を扱う県立美術館が既にあります。ならばここは今の時代を表現した美術に焦点を絞ろう」と。今『伝統工芸』と呼ばれているものも昔はみな『現代美術』だったはずです。新しい美術に触れる機会を作り、それを発展させていくことも必要ではないか、と考えたのです」

誰でも気楽に楽しめる 現代美術を見事形に

グレイソン・ペリー、村上隆、マッシュ・バーニーなど世界でもトップクラスの作家による作品を展示。充実した内容は専門家の間でも評価が高い。しかし現代美術というのはある種スノッブなアート系人種のための得意分野。一般に受け入れられるのは難しそうだが……。

「現代美術はとかく難解とかわれがちですが実は入りやすいんです。同じ時代を生きている作家の興味のあることが作品となってい

るから、私たちも楽しめる要素が多分に含まれているんです」

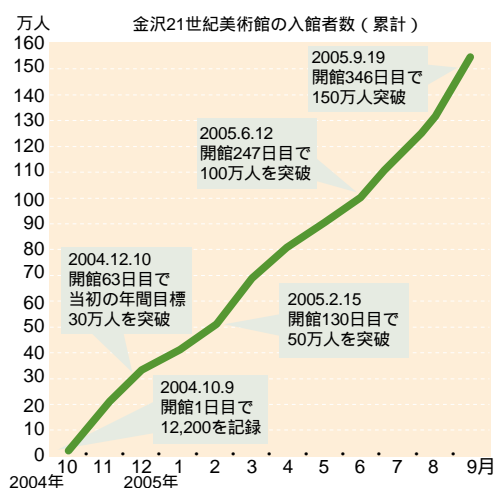
確かに館内を見渡すと老若男女、客層の幅が広く、しかも一様に楽しそうにアートを体感している。なんとも希有な光景だ。

「それはこの大きな特徴ですね。建物の入りやすさに加え、雰囲気作りも留意しています。走ってはいけないとか、大声はダメといった注意事項はもちろんありますが、多少ザワザワする部分は自然に任せ、肩の凝らない空間を作りました」

建物の設計を手掛けたのは、妹島和世、西沢立衛（SANAA）というふたり組の建築家。円形の館内は美術館ゾーン、交流ゾーンというふたつのエリアに分かれている。「昔ながらの金沢の街並みが館内にも続いている」という発想のもと細かな路地を展示室の間に巡らせた美術館ゾーン、それを取り巻くようにカフェや託児室がある交流ゾーンを配した。街の個性を反映させ、触れ合いの場として機能させる、という目的を建築の段階で具現化している。

「交流ゾーンが入場無料なのも入りやすい一要素でしょう」
さらに一般の人々を取り込む創

フローリアン・クラールの作品は屋外に設置。パイプは一對ずつ地下でつながっていて声が届くという仕組み。子供たちは対になっているパイプを探すのに興じるとか（右）。開館からの入館者数は驚異的な増加（左）



意工夫も怠らなかつた。プレイベントも開館前に二〇回ほど行い、館長は一〇〇回以上講演会を行った。開館後には金沢市内の子供たちを学校単位で無料招待し、その際配った小中学生向けのパンフレット『まるびいとの遭遇』に「もう一回券」をつけた。すると今度は子供たちが親を連れてくる。客層を広げるには効果的だった。こうした地道な活動によって、市民の現代美術に対する「食わず嫌い」を見事に払拭してしまった。

格調高い外観に緊迫した雰囲気、一部の人のみ開かれた高尚な世界。これまでの美術館の概念はここにはない。街に馴染んで自ら歩み寄って、多くの人に美術の素晴らしさ面白さを理解してもらおう——まさに革新的な美術館作りを成し遂げたのだ。

「今後の課題はここを中心に回遊性を生み出すこと。金沢駅から美術館までをミュージアムアベニューのようにして街全体を盛り上げていけたら、と考えています」

二年目の目標は年間一〇〇万人の動員。今後は伝統工芸と現代美術の融合など、新しい提案も目白押しだ。

「一年を通して見ると必ず自分のひっかかる展示がある、そういう美術館を目指したいですね。きつと一〇年後には現代美術を語れるお年寄りが金沢にはたくさんいると思います。格好いいと思いませんか？」

伝統工芸のこれからと行政の産業復興

美術館内の市民ギャラリー壁面には、台湾のアーティスト、マイケル・リンが加賀友禅にインスパイアされて描いたという鮮やかな

ペインティングがある。彼が創作に際し技法を学ぶため訪れたのが、金沢在住の加賀友禅作家・毎田健治氏である。

「染め物にはうつけつ染めや型染めなどいろいろありますが、友禅染だけは日本独自の関心を持ったのでしょ」と、毎田氏。

その工程は、気が遠くなるほど綿密で手間がかかる。青花の汁で描いた下書きを防染効果のある糸目糊でなぞり、下書きを消し、糊を定着させた後ひとつひとつ色を乗せていく。色味を調整するのも、模様を縫い込みで合わせるのも高度な技が必要だ。

ところで石川県ではなぜこれほど伝統工芸が隆盛したのか。起源は江戸初期にある。外様ながら百万石の雄藩であった加賀前田藩が幕府に対し謀反の意志のないことを示すため、藩の財源を惜しみなく工芸に注いだ。それから四百年、この街の工芸は潰えることなく続いているのだ。

しかし時代の変化は伝統工芸にも影を落とし、徐々に需要が減っているのもまた現実だ。そこで「もう一度金沢の工芸を盛り上げよう」と行政も立ち上がった。金沢市は、平成十六年に「金沢ファ

ッション都市宣言」を謳い、平成十七年一月にはその実践期間である「金沢ファッション産業創造機構」を設立。金沢市産業局・ファッション産業振興室長の八田誠氏はその経緯を語る。

「金沢には伝統工芸、芸能があります。それに連関して産業が生まれました。手仕事の技から繊維を織る産業ができ、そこから工作機械ができる。そして産業がまた文化を支える。そうやって街が栄えてきた。この土壌を活かし、地場産業をもっと一度振興しようという目標を掲げました」

例えば毎田氏の協力を得て加賀友禅の布でランブシェードを試作するなど、現代のライフスタイルに合った工芸品の商品開発を提案し、一方ではデザイナーとの新商品開発にも余念がない。その一環として行ったのがミュージアムグッズの制作。地元の作家に声を掛け、水引アクセサリー、和風Tシャツなど七点のオリジナル作品を商品化した。

「21世紀美術館の発信力や創造性を活かし、金沢の工芸や美術を世界に発信することができればと考えています。多くの方々に金沢のものづくり、また街を見ていた

だきたいと考えており、来秋には金沢発のファッションイベントも行いたいと思っています」

伝統工芸を盛り上げ、新たなものづくりを進める。企業と作家、デザイナーなどの橋渡しをし、制作環境をサポートしているのだ。

「マイケル・リンさんの絵が近

ミュージアムグッズの一部。岩井康之介デザインの「まるびいUSBメモリーチップ」128MB（上）坪倉美枝子デザイン・製作の「和風Tシャツ」（下）。いずれも人気の高い商品だ。



金沢市産業局、ファッション産業振興室長の八田誠氏。ファッション産業都市戦略の具現化施策を担当。



国際的芸術家滞在制作事業の責任者、金沢工芸美術大学の教授・秋草孝氏（下）。来日したデイゴ・エスポジト氏は自身の作品のため戸室石を選定。（左上）選出された10名ほどの生徒がアーティストと共に作品制作（左下）写真提供：金沢21世紀美術館



代建築の壁面の一部になっているのを見て、加賀友禅にも多くの可能性があると刺激を受けました。伝統工芸もみなさんに使ってもらってこそ。それをつなげていこうと思ったなら現代に合わせた製品を作る模索も必要でしょう」

そう語る毎田氏の工房には二〇名を超えるお弟子さんがいる。大学の建築科で学んだ息子さんも跡を継ぎ、住空間と結びつけた加賀友禅の在り方を試行錯誤している。伝統の技もまた次世代へと着実に歩を進めている。

美術館と美大が協力し 街中で展開されるアート

この街の美術を語る上で忘れてはならないのが、一九四六年に創立された金沢美術工芸大学だ。この学校では九八年から毎年「国際的芸術家滞在制度」（アーティスト・イン・レジデンス）と冠し、海外からアーティストを招聘する事業を行っている。金沢にいる期間、作家は作品を作り、学生たちともコラボレーション制作するという贅沢な内容。さらに面白いのは展示会場も自分たちで探すこと。お寺やカフェなど金沢市内の至る場所がその対象となる。実行委員会の責任者を務める金沢美術工芸大学の秋草孝教授は言う。

「学生と作家が街中を巡り歩いて会場を選ぶことに重要な意味があるんです。金沢はどっという場所なのか知り、この街に影響を受けてどんな作品にするか決めていく過程を作家と体験できるのです」

金沢はとにかくアートイベントが多い街だ。「アナザームーブメント」では街中に置かれた展示物を巡りながら金沢に親しみ、日本屈指のデジタルアーティストが集う「eat KANAZAWA（イート

金沢）ではそれを目的に全国から人が集まる。美術を入り口に様々な交歓がなされるというのはなんと素晴らしいことだろう。こうしたイベントも21世紀美術館の存在により、一層幅に広がりが出たという。

「美術館の学芸員も招聘する作家を提案しますし、作家の講演を大学内だけではなく美術館でも行い、門戸を開くことができる。金沢はアート色の強い文化的な街だから、いきなり国際的なことができるんですよ。本当に希有な場所だと思いますね」

ひとつの美術館の出現が街を活性化させた。まるで今まで細かく分離していた街の個性が21世紀美術館を通して融合し、広く世界に放たれていくようだ。

秋草教授も毎田氏も八田氏も異口同音に言うのが、「金沢はごく普通の人たちの見る目が非常に高い」ということ。

「だからこそ可能だったという意見も多いですね。ここには伝統工芸に触れてきた四〇〇年の歴史がある。この街の人はきれいなものが好きなんです。そこに現代美術が来た。畑が耕されて水もまかれたいい土に種がまかれてすくす

く育った、そんな気がします」と美術館の落合さん。

確かに、美術による賑わい創出がどの街でも可能か、といえばやはり金沢という土壌があつてこそのお話だという気がする。しかし金沢における芸術のよつに、どの都市でもその地ならではの特性があるのではなからうか。連綿と続いてきた歴史やその場所に今も息づいているなにかが、日本の風景がどこでも同じ色合いに染まりつつある今、地域復興に求められるのは中庸化ではなく、「これぞ」と思う部分に特化する潔さなのかもしれない。

「僕は現代に適したものの作りの環境を作りながら、心は昔ながらの基本を大事にした手作りの世界を表現したいと思ってる。古いものだけに固執していたら、この街は残っていかなかった。僕は保存と開発と両方うまくやっていかなければいけないと思う。そのバランス、センスが大事になってくるんやね」

幼い頃から伝統工芸に接してきた毎田氏の言葉が、原点を見失わず独自の改革を進め、活気に満ちた新たな歴史を刻みはじめた金沢の今を表しているように思えた。